


がちむち
彼女と
汗だくエッチ

運動一筋だったガタイの良い女の子が性の喜びに目覚めます





太陽が照りつける暑い夏の日。
今は休みに入ったところだが僕は校門の前である人が出てくるのを待っていた。
しばらくするとソフトボール部のユニフォームを着たひとときわ体格の良い女の子が
出てきた。

僕の彼女、中村さんだ。

彼女は先の夏退会で部活は引退したばかりだが今日は後輩達に頼まれて
練習に参加していた。

その彼女を僕はある狙いがあつて待っていたのだ。

僕を見つけるなり少し驚いた様子だった。

何してるんだこんなところで…今日は部活だって言ったたる

「この後デートでもどっかと思って…」

「こんな格好でどこ行くんだよ

汗びっしりだし

一回帰ってシャワー浴びたい」



「じゃあ僕の家でシャワー浴びなよ 中村さん家より近い」
「こんな汗まみれで人の家あがれないだろ……!」

「うちなら大丈夫だから 着てすぐシャワー浴びればさ」
「……わかったよ」



僕の部屋はエアコンを効かせているため窓は締め切っている。

中村さんは汗だくで密閉された部屋にいたことが落ち着かない様子だった。

「おい…早くシャワー貰ってくれよ」

「やるじゃんやっつてからね」

「やるじゃん…っ、お、お前…」

ムンで僕は彼女に正直に目的を告げた。

「一回部活終わりで」

ユニフォーム姿の中村さんとしたかったんだよね」

「バカ！そんなことさせるか変態！ もう帰るぞー！」

「中村さんがいたとっころ、」

もう中村さんの匂いが染み付いている」

「……っ！」

「部屋の中も中村さんの匂いになってきているね」

「だから早くシャワー貰せて言ったんじゃないかー！」

「臭いって言うてるんじゃないよ 僕にとっては良い匂い……！」



「何も俺は変態的な意味で中村さんの匂いが好きって言ってるわけじゃないだって」
「……」
「汗の匂いは中村さんが
頑張った証拠だもん」

「僕は一生懸命運動する中村さんが好きだったから……」



「……勝手にしろっ！ ただあんまり身体や匂いの……とか口には出すなよ……
私だって恥ずかしいんだから」
「ありがとう中村さんー！」
意外と押しに弱いと知るが
またかわいらい。

僕は中村さんの
ポリウムある身体に手を回し
ぎゅっと抱き寄せた。



筋肉質な中村さんだが乳房にはしっかり女性らしい脂肪がのびている。
以前こそりブラのタグを見たことがあるがHカップあるようだ。
その二つの膨らみを
ゆっくり手の平で
包み込む。

ゆっぴん



中村さんの腕を押し上げると汗で光る腋があらわになり蒸れた匂いを振り撒く
この発汗量もすごく汗の雫がしたたる様子も見て取れるほどだ。
肩周りの筋肉がしっかりとった中村さんの腋は形がハッキリして美しい。

くっつく

4
4



膝裏から足の裏へ視線を向けていくと
中村さんは急に起き上がり
足の裏を隠した。

「足は汚いから見るな…」

こんな足で人の家へ上がるのも嫌だったのに…」

「まじめだなあ」

…そういうところも好きなんだけどね」

「とにかく足はダメだ…」

汚いし……」

その…臭いだろうし……」

ん

ん

じい…

じわ…

「えっ…?」

僕は彼女の足を掴み

無理矢理

足の裏が

見える

ように持ち上げた。

蒸れた足裏を包む

白いハイソックスは

土などの汚れで

黒ずんでいる。

じゅ



「お、おい！聞いてたのか！？」

「大丈夫だよ

中村さんの

匂いを全部

知りたいんだ」

「何を言ってる……」

アア
カア

スニ
スニ

足に顔を

近づけ

匂いを

嗅いでみると

すえた匂いが

広がる。



「……」

中村さんは絶頂直後の腔内に
太いペニスを挿れられて再び絶頂寸前だ。
憧れだった女性が自分の肉棒で
貫かれてよがっている様を見るのは
なんとも言いがたい。

ガッ

ガッ

